

「〈知〉のオントロジー」—現代思想の構図— : (8/9)

by 佐伯 守 (2000.12.25、萌書房):

VII. 無底性の構図

(transformed by Takaya Endo)

- 7.1 〈差異〉は物事の静止的固定的な区別や区分けとは別の概念
- 7.2 〈このもの〉性は或る瞬間のうちの現われであるかも知れません
- 7.3 ドウルーズは〈差異が差異化する〉という事態を認識論の中心に据えた
- 7.4 〈差異〉は多様体、変化性から産出されるもの、そこから湧出するもの

7.1 〈差異〉は物事の静止的固定的な区別や区分けとは別の概念

〈差異〉は、物事の静止的固定的な区別や区分けとは別の概念です。それを〈渦巻〉のイメージで捉えることもできます。渦巻は〈遠心力〉と〈求心力〉という差異的な逆の動きによって〈ひとつ〉の同形性を得ています。差異は生成・運動を生み出す源泉であり、かつ〈かたち〉を形成する運動の源泉でもあります。渦巻がしばしば〈生命〉の比喩に用いられる理由がそこにあります。

フォン・ヴァイツゼッカーの言う〈ゲシュタルトクライス〉(形態円環)も〈差異〉を核としていることを、まずみておきましょう。前進をめざす方向から〈それ自身に立ちもどる〉という事態が、次のように、〈円環[クライス]〉で示されています。

(1)

「円環を眺めていると、全体が一つの道／行程に、ということはそれ自身の内部にまとまりのある閉じた図形に見えてくるに違いない。それをわれわれはゲシュタルト[形態]と呼んでいる。円環のゲシュタルトは、変化しながらも自己自身への還帰が可能であることの比喩的/図像的なシンボルとなり、このシンボルが生物学的/生命論的行為の特性を表現するというわけだ。……ゲシュタルトクライスとは、パトス的にとらえた生きる行為の本質構造なのである。(木村敏訳『生命と主体』「アノニューマ」7)

(2)

「生きものの行為が反論理的であるゆえんは、主体／主観が変化しながらも同じ主体／主観のままということにある。主体／主観は、差異における同一である。具体的に表象すると、運動しながらそれ自身に立ち帰ってくるものということになる。つまりそれは、あるものが運動を通じて同じ場所に帰ってくる円環のイメージ／比喩Bildである。」(同、38、傍点引用者)

〈差異〉は分離・拡散の原理ではなく、ひとつの持続的運動、つまり差異化が自己化を生むような運動の原理であると言えます。

G・ドウルーズもまた、〈差異〉を、差異化の運動として、潜勢力(潜在性potentialite)における動的なものとして、たとえばベルグソンのいう〈生命の躍動[エラン・ヴィタール]〉のなかに最も純粋なかたちでみうるものとして、イメージしています。生命自身の自己差異化が、生命を支えているわけです。

まず、ドゥルーズの『ベルグソンの哲学』(宇波彰訳)から、いくつか引用してみます。

(3)

「ベルグソンの意図の本質は、質的な差異を否定のすべての形態と無関係に考えることにある。つまり存在のなかに差異は存在するが、否定的なものはない。すなわち、否定はつねにあまりにも一般的な抽象的概念を含んでいる。」(同、第二章)

(4)

「ベルグソンの哲学は、可能性のカテゴリーを拒否する場で、潜在性という観念に大きな重要性を与えているが、どうしてそうなっているのでしょうか。[中略]現実化のプロセスで最初にあるのは差異である。それは出発点である潜在的なものと、到達点である現実的なものとの差異であり、……要するに、潜在性の特質は、差異化しつつ現実化するという仕方、また、現実化するためには、差異化し、差異化の線を作らざるをえないという仕方である。」(同、第五章)

空間的にそこにある物とここにある物との単なる違いとしての差異は、量的な差異、程度の差異、否定性の差異でしかなく、それは〈傾向tendance〉を生み出す動的源泉的な差異ではありません。動物や植物の〈成長〉は、つねに自己差異化を行います。それは、おのれの成体へむけての〈傾向〉をみずから創り出すことでもあります。

ベルグソン哲学のなかになにを読み込むか、あるいは、そこからなにを読み取るかは、重要な問題点です。ドゥルーズの『差異について』(平井啓之訳)から、さらにその〈読み〉に触れておきます。

(5)

「存在とは他者化[変質]であり、他者化[変質]が実体なのだ。そしてこれこそまさにベルグソンが持続と呼ぶものである。……すなわち持続とは差異を生ずるものあるいは本性を変えるものであり、質であり、異質性であり、自己に対して差異を生ずるものだから。」(同、「ベルグソン1859 - 1941」)

(6)

「一方、物質はたんに無差異的なもの、繰り返されるものかそれともたんなる程度、もはや本性[nature]を変えることはできないものである。」(同上)

〈実体〉は同一性にはなく、差異化にあり、差異化は自己変成的な自己変質化のことです。そこにはまた、〈否定〉の要素はありません。まさに〈存在〉とは〈一〉でもなければ〈多〉でもなく〈差異〉においてあるところのものです。ドゥルーズは、抽象的に言えば、〈分割〉以前へと、あるいは、対象化的な対〈物質〉の姿勢から生まれ出た諸観念・諸思考から離れて、それ以前へと、戻ろうとしているのです。ドゥルーズは言います。

(7)

「予見不可能、偶然性、自由は、つねに原因に対する独立を意味している。ベルグソンがエラン・ヴィタール[生命の躍動]に多くの偶然を付与するのは、この意味においてのことである。彼が言いたいことは、事象がいればその諸因の前に来る[先立つ]ということであり、諸因が後に来るからにはその事象自体からはじめねばならぬということである。……ベルグソンの要求とは、事象が別ものではなくてこのものであるかを了解させることである。[中略]ベルグソン哲学は差異の哲学であり、差異の実現の哲学である。差異そのものが存在し、この差異は新しさとして実現され

る。)(同、「差異について」、傍点引用者)

事象の〈このもの〉性を、それ以外のものに還元することなく、また因果性の図式を用いて説明するのでもなく、事象自体から始めて・そのうちで捉えること、それがここで求められている内容です。

しかしそれはきわめて困難な要求というほかはないでしょう。たとえば、〈生命〉という、物質的要素には還元しえない自己差異化の過程、つまり持続であり傾向であるものの純粋なく〈このもの〉性を、言語の網でいかにすくいとるか、という問題がそれにあたります。生命とは、なにになにではない(否定性)とか、なにになにとはちがう(比較・不等性)という言い方は、生命の〈このもの〉性をいけば外側から外部的尺度で測ろうとすることではかないわけです。

7.2 〈このもの〉性は或る瞬間のうちの現われであるかも知れません

〈このもの〉性は、しかし、どこかにこれとして在るもの、これとして定義可能なもの、あるいはなんらかの本質性、といったものではなくて、いわば或る瞬間のうちの現われであるかも知れません。

ところで、同一性からではなく差異から始める思想は、空間的等質化つまり分割化や区分化をその尺度とはしないし、全体化や体系化をめざしもしません。ドゥルーズが、ドゥンス・スコトウスからうけつづく此性[これせい]hecceite)の概念が、それを象徴しています。

此性つまり〈これであることhaecceitas)とは、〈個体individuum)の本性をさします。これにはしかし、説明が必要でしょう。大村晴雄は次のように言います。

(1)

「一般者としての質料のうちに、何かある積極的な存在の中心ができるとき、それが、個体成立の起源である。ドゥンスは、これを、indivisibilitas「分かつたれ得ないということ」、repugnantia ad divisibilitatem「分かつたれることへの反抗」などといった。これらの言葉の意味は、反一般者ということである。一般者を分割することによって得られる特殊者として、個体をとらえてはならないということである。一般者の「分ち」としての特殊者は、それ自身、一般者でなければならない。……このような分割にあくまで反抗するもの、その意味で、一般者の体系のうちには、どのようにもおさめることのできないある内容——それが「個体」である。」(『近世哲学』第一章)

(2)

「我々の視覚に入る色彩の一つ一つをとってみても、何らの本質性もそなえていない、その場合にかぎられた存在にすぎないのであるが、我々の視覚をよりどころとするかぎりでは、それらは、みな、一つ一つ、打消すことのできないある力を有し、我々に向かって、強く、自己の存在性を承認することを、追っているようにみえる。このような存在が、ドゥンスのいうところの「個体」であった。彼は、また、同じものを、res「個物」という言葉で表す。そして、realitas「個物性」という言葉で、「事実」から受け、ある種の力を意味させたのである。」(同上)

〈個体〉とは、一般者の存在を奪い、それを破り去り、それにとって代わろうとする〈力〉の存在である、と言われていいます。ここからまた、ドゥルーズが重要視する〈強度intensite)の概念も生まれてこよう、と思われまます。ですが、ここで言う〈個体〉はなかなかイメージのしにくいものです。あのモナリザの〈微笑〉のようなものを想定するとよいのでしょうか。形相に対する質料とは、陶器に対する粘土、言わば材料＝物質のことです。絵は形や色をもっていますが、〈微笑〉そのものはそれら一般的なものから抜け出た独自の個性を発揮しています。あるいは、resとは、単なる物ではなく、当の所有者にとって独自の意味のこもった貴重品のようなものかも知れません(今村仁司『交易する人間』参照)。あるいはまた、ドゥルーズが日本の俳句について語ったこと

が参考になるかも知れません。こうです。

(3)

「人称や主体、あるいは事物や実体の個体化とはまったく違った個体化の様態がある。われわれはこれを指して〈此性〉hecceiteと呼ぶことにする。ある季節、ある冬、ある夏、ある時刻、ある日付などは、事物や主体がもつ固体性とは違った、しかしそれなりに完全な、何一つ欠けることのない個性性をそなえている。この場合すべては分子間や微粒子間における運動と静止の関係であり、また触発し触発される(情動をおよぼし情動を受けとめる)能力であるという意味で、こういったものは〈此性〉なのである。〔中略〕さまざまなタイプの文明のうち、特に東洋は主体性や実体性にもとづく個性化よりも、〈此性〉にもとづく個体化をはるかに多く含みもっている。たとえば俳句は、複雑な個体を構成する流動的な線として、数多くの指標をもっているものでなければ成り立たない。」(ドゥルーズ／ガタリ、宇野邦一他訳『千のプラトー』10章)

たしかに俳句は、季節の線、生き物の線、感情の線、あるいは空間や時間の線などが集まり交わるその集まりの〈強度〉のところで成りたっています。イメージ化の困難なく〈此性〉ですが、それは起源も目的もない、瞬間(一瞬ではなく)のようなものだ、とドゥルーズはつぎのように言います。

(4)

「〈此性〉には始まりも終わりもないし、起源も目的もない。〈此性〉は常に〈ただなか〉にあるのだ。〈此性〉は点ではなく、線のみで成り立つ。〈此性〉はリゾーム〔根茎〕なのだ。」(同上)

(5)

「瞬間を超えるものは一つ残らず除去すること、しかし瞬間が含むものはすべて注ぎ込むこと。——そして瞬間とは一瞬ではなく〈此性〉なのだ。私たちは〈此性〉に滑り込み、〈此性〉は〈此性〉で、その透明性によって他の〈此性〉に滑り込む。世界の時に遅れないこと。知覚しえぬもの、識別不可能なもの、そして非人称的なもの——三つの美德をつなぐ絆はここにある。自分自身を一本の抽象線に、一本の描線に切り詰め、他の線との識別が不可能となる帯域を見出すこと、またこのプロセスを経て〈此性〉や創造者の非人称性に分け入っていくこと。そのときわれわれは、いわばひととと〔一本〕の草だ。」(同上)

〈瞬間〉とは、ある出来事の訪れ、あるいはなんらかの〈強度〉の出現、差異の生起のときと言えます。〈此性〉は、言わば思考する〈私〉なるものを無視して、差異の生起のうちに出現するなにか途上のなものです。

7.3 ドゥルーズは〈差異が差異化する〉という事態を認識論の中心に据えた

認識する主体である〈私〉が、ある実体的なものを、なにかとして表象(像化)して、それを自分の前に据え置く(=再現前化)という、従来の認識論の構図(表象主義=人間主義)に抗して、ドゥルーズは〈差異が差異化する〉という事態を、認識論の中心に据えた、と言ってよいでしょう。差異はモノとモノとの間の違いのことではなく、現出の原理です。現われるものは、差異から差異によって現出するわけです。差異は〈存在〉の根拠です。

〈私〉が〈同一性〉を尺度にして〈差異〉を測る、というわけではありません。差異が〈個性性〉を形成するわけです。ドゥルーズは言います。

(1)

「表象＝再現前化[representation]は、個体化を、《私》という形相と、自我という質料に縛り付けることから始めたのだ。……表象＝再現前化にとっては、あらゆる個体性は人称的であること(《私》)、ならびに、あらゆる特異性[単独性]は個体的[個人的]であること(《自我》)が必要なのである。[中略]差異的＝微分的な規定ならびに特異性が前個体的であるのと同様に、個体化の差異ならびに個体化は、先-《私》であり、先-自我である。非人称的な個体化と、前個体的な特異性との世界、それが、《ひと》の、あるいは「彼ら」の世界[モンド][世間]であり、これは、陳腐な日常生活に帰せられるものではなく、反対に、出会いと共鳴がそこで仕上げられる世界であり、ディオニュソスの最後の顔であり、深い[プロフォン]ものと無底[サン・フォン]との真の本性である。この無底[サン・フォン]は、表象＝再現前化には収まりきらず、かえって見せかけ[シミュラクル]たちを到来させるようなものである。」(財津理訳『差異と反復』「結論」)

右にいう酒神・ディオニュソスについては説明が必要でしょう。若き日のニーチェの作品『悲劇の誕生』で、ギリシア人にとって、ディオニュソスの秘祭[オルギア]=密儀は、世界救済の祭典・聖化の祭日であると語られています。ここでは、澄明・形相を象徴するアポロンと、深淵[しんえん]と過剰を象徴するディオニュソスとの区別について、W・F・オットーの表現を引いておきます。

(2)

「ディオニュソスはひょっと姿を現わし、人を錯乱させる不気味な眼差しをもった神であり、あらゆる民族の間で不気味な霊の直接的顕現と見なされている仮面[マスク]が彼の象徴である。ディオニュソスそのものが仮面としても崇められる。彼の眼差しに出会うとひとは息もつまり、落ち着きを失い、秩序だった現存在のあらゆる枠を踏み外す。狂気が、名状しがたい恍惚感に誘いこむ至福の狂気、あらゆる地上の重圧からひとを解放し、踊り歌いくる狂気、四肢を引き裂き殺戮[さつりく]をこととする暗い狂気がひとびとを襲う。／彼とその狂乱の群れとが現われるところ、そこには太古の世界が再現する。そこではあらゆる拘束と掟とが無視される。なぜならこの世界は一切の拘束や掟よりも古いのだから。またこの世界は序列も性の秩序も認めない。なぜならこの世界は死ともつれ合った生命として、一切の事物を等しく包括し、統合しているのだから。」(辻村誠三訳『神話と宗教』第二章)

ドゥルーズのいう〈ディオニュソスの最後の顔〉は、仮面と関連しています。そして、ディオニュソスの地平は深さと暗さを象徴しています。

〈差異〉は、在るものではなく、現われるものであり、対立・類似・同一性・類比は、その現われが残した或る痕跡のようなものであって、その逆ではありません。つまり、思考された対立が生み出すような〈差異〉、それは、思考された差異でしかありません。差異は思考されるものではなく、否定を知らぬ肯定にただ肯定される、のみです。

表象＝再現前化の諸限界のなかにとどまるかぎり、哲学は、〈意識〉の二律背反たる〈理論〉的二律背反の犠牲になる、とドゥルーズは言います。この点をやや詳しくみておきます。

(3)

「〈私は思考する〉は、表象＝再現前化のもっとも一般的な原理である。……すなわち〈私は理解する〉、〈私は判断する〉、〈私は想像しかつ想起する〉、〈私は知覚する〉——《コギト》の四本の枝としての能力——の統一である。そしてこの四本の枝のうえで、まさに差異が十字架にかけられる。それらは、同一的なもの、似ているもの、類比的なもの、および対立したものが、異なるものとしてそこでのみ思考されうる四重の首枷である。差異が表象＝再現前化の対象になってしまうのは、理解された同一性、判断された類比、想像された対立、知覚された相似[類似]に関連する場合である。ひとは、差異に、比較ノ原理 principium comparationis としての充足理由を

与えてしまうのだ。それゆえに、表象＝再現前化の世界は、〔表象＝再現前化されていない〕〈それ自身における差異[ディフェランス]〉を思考することができず、それと同時に、〈それ自身へ向かう反復[レペティション]〉を思考しえないという、その無力[アンピュイサンス]を特徴としている。そうした反復[レペティション]を思考しえないというのは、反復[レペティション] repetition はもはや、再認[レコグニション] recognition、割りふり[レパルティション] repartition、再生[ルプロデュクション] reproduction、類似[ルサンブランス] ressemblance ---それらは、そのRE〔再〕という接頭辞を、表象＝再現前化[ルプレザンタシオン]のもろもろの単純な一般化へと外化している---を経由してでしか、把握されていないからである。〕(前掲『差異と反復』、第三章)

7.4 〈差異〉は多様体、変化性から産出されるもの、そこから湧出するもの

〈差異〉は多様体[ミュルティプリシテ]、変化性[ヴァリエテ]から産出されるもの、そこから湧出するものです。そして、産出や湧出の原動力が〈反復〉であり、それがニーチェの〈永遠回帰〉とかなることになります。一と多を、またその対立を、一と多の相互限定を、秩序と無秩序を、一挙に同時にのみこみ消化するのが〈多様体〉のイメージです。

脱-中心、脱-同一、脱-根拠、脱-原型、脱-始源、脱-規度[きたく]など、さまざまな〈脱〉のひしめき合い、それが多様体の〈多〉をつくりあげているのであり、〈永遠回帰〉は、この〈多〉の不死性の象徴であり、〈一〉への不帰の宣言であり、そして〈永遠〉と〈回帰〉とがかさなり合うとき、すべての〈脱〉さえ脱落する、との告示です。

では、ドゥルーズは〈永遠回帰〉のうちになにをみているのでしょうか。

(1)

「永遠回帰を厳密に理解するなら、永遠回帰は、〈もの〉はいずれも還帰することによってでしか存在しないということの意味し、〈もの〉はそれぞれ、背後にオリジナルも起源さえも控えていない無数のコピーをコピーしているものであるということの意味するのである。だからこそ、永遠回帰は、「パロディー的」だといわれるのだ。永遠回帰は、それが存在させ(そして還帰させる)ものを、見せかけ[シミュラクル]であるもの[エタン][存在者]として性質づける。永遠回帰が《存在》(非定形なもの)の力[ピュイサンス]であるとき、見せかけ[シミュラクル]は、存在するもの---「存在者[エタン]」---の真の特徴あるいは形式になる。」(同、第一章)

(2)

「永遠回帰は、そのすべての力[ピュイサンス]において肯定されるとき、〈土台-根拠〉のいかなる創設も許しはせず、反対に、本源的なものと派生的なものとのあいだに、つまり〈もの〉[本物]と見せかけと[シミュラクル]のあいだに差異を置くような審廷としてのあらゆる根拠を、破壊し、呑み込んでしまう……永遠回帰は、わたしたちを、普遍的な脱根拠化に直面させるのだ。「脱根拠化[エフオンドマン]」という言葉によって理解しなければならないのは、まさに永遠回帰を構成する媒介されていない基底[フォン]の自由であり、他のあらゆる基底[フォン]の背後に控える或るひとつの基底[フォン]の発見であり、無底[サン・フォン]と根拠づけられていないもの[ノン・フォンデ]との関係であり、非定形なものおよび最高の形相[見せかけ]に関する直接的な反省である。あらゆる〈もの〉は、動物であろうと存在であろうと、〔永遠回帰においては〕見せかけ[シミュラケル]の状態にもたらされる。」(同上)

そして、ニーチェはその〈永遠回帰〉を一言にして、こう言います。

(3)

「世界はおのれ自身で生きる、その糞尿がその栄養なのである。」(原佑訳『権力への意志』番号一〇六六)

世界の秘密はその、生産する〈糞尿〉、糞尿する〈欲望〉にあり、永遠回帰の秘儀は、糞尿が栄養の〈見せかけ〉となり、終わり始まりとが相互に〈見せかけ〉あう、という〈生産〉する見せかけにある、ということになります。〈見せかけ〉を欲望する生産、それが世界の別名であり、そして、〈われわれ自身〉の別名でもあるわけです。

だが／そして、仏典は言います。

(4)

「また、”実体のないもの、実体に属するものでないもの、無常なもの、不確實のもの、永続しないもの、変移する性質のものであるから、未来は空であり、静寂である”とこのように考えて実践するのではない。また、”実体のないもの、実体に属するものでないもの、無常のもの、不確實のもの、永続しないもの、変移する性質のものであるから、現在は空であり、静寂である”とこのように考えて実践するのでもない。

——菩薩がこのように実践するとき、善勇猛よ、知恵の完成の修業は完全なものとなる。」(大乘仏典1、戸崎宏正訳「善勇猛般若経六」)